〔書　評〕

『日本古代の表記と文体』

沖森卓也著

乾　善彦

一、歴史の風景

本書は『日本古代の表記と文体』と題されるが、漢字でもって古代日本語が書記されるその方法の歴史的研究であり、カバーに「国語学上の精緻な論証を基礎に、木簡等の新たな文字資料の適切な読解を提示する。」とあるとおり、古代の文字資料の、誰もが納得できるような丁寧な読解が本書の基礎となっており、これがもっとも大きな特色である。

近年、各地で七世紀から八世紀にかけての木簡が大量に出土し、古代の文字資料は、質量とも増大してきた。それに伴って従来から知られていた資料の見直しが求められているわけだが、本書では全般にわたってそれが誠実に行われている。たとえば、冒頭第一章第一節では、埼玉県行田市稲荷山古墳出土鉄剣銘や和歌山県橋本市隅田八幡宮蔵の人物画像鏡銘の「ヨミかた」について、従来、姓と理解されてきた「臣・費直」を「ヲミ・アタヒ」とヨムのではないとの新見が提示されている。従来の説を十分に検討した上で、資料全般を見渡した「歴史観」によって、新たなヨミの可能性を導いたものであり、その姿勢が本書には貫かれているのである。

その是非については、評者にも意見があり、見解をことにするところもあるが、本書を「歴史的研究」と位置付けるのは、そこに古代日本語書記に対する著者の確たる歴史観を読みとることができるからである。第一章と第二章とに、その枠組みが示されている。

資料から歴史を読みとるのは、その歴史観による。したがって、同じ資料を目の前にしても、そこに描かれる歴史は、人によって異なるであろう。どこに視点を置くかによっても変わってくるし、同じ所に視点を置いても、その理解は人によって異なることがある。本書に描かれた歴史は、従来のものと、似ているようで非なるところに、本書の真髄がある。穏当と革新、一言でいってしまうのは大変失礼なのを承知して、この二語にわれわれが学ぶべき、本書の高い価値を見出すのだが、そこに示されるのは、著者の歴

史観なのである。従来の説と同じように見えても、そのよって立つところが異なるのであり、そのことの検討も新説以上に重要となる。

評者の目を通じて、という前提はいたしかたない。それを前提に、著者の目に映った古代日本語書記の歴史の風景を、本書の次第に従って眺めることにしよう。

二、資料と位相

本書は次のような構成になっている。

第一章　日本語表記の創造
　第一節　日本語表記の黎明
　第二節　訓の成立と音仮名の展開
　第三節　音訓の交用
　第四節　万葉仮名と文章文体
第二章　上代表記体の成立
　第一節　和文の成立
　第二節　万葉仮名交り文の成立
　第三節　宣命体の成立
　第四節　万葉仮名文の成立
第三章　上代における表記と文体の交渉
　第一節　古事記における字順と用字
　第二節　万葉集における動詞活用語尾の表記
　第三節　風土記の文体について
　第四節　文体の史的研究に関する覚書
第四章　宣命・祝詞の文体と表現
　第一節　続日本紀宣命の用字と文体
　第二節　続日本紀宣命の表記と文体――称徳期について――
　第三節　平安初期宣命の文辞について
　第四節　延喜式祝詞の表現とその形成

前半二章が文章全体の表記関係、後半二章が個別の文体関係の論考となっている。もちろん、表題の「表記と文体」は本書全編を覆うものであることを前提としての、大まかな枠組みとしてである。

第一章では、日本語が漢字と出会い、訓を獲得して、やがて音と訓との交用や、万葉仮名交じり文などの日本語の文体が成立するその過程を、資料の検討を通じて素描しつつ、そこに存する様々な問題について考察を加える。そのうち、音仮名と訓仮名との機能の違いとその交用は大きな問題のひとつである（第二節、第三節）。音仮名は漢文の中に常に用いられてきたいわゆる仮借の用法、訓仮名は漢文の理解行為の中で漢語の翻訳を通じて社会的に訳語が定着することによって訓が生じそれを仮借したものとするのは、おそらく通常の理解である。それを確認した上で、滋賀県北大津遺跡出土の音義木簡を取り上げて、音訓の交用を論じた第三節を注意しておきたい。

ここで、著者は、この音義木簡の注記を、まず、A万葉仮名で読みを示したものと、B漢字で意味を示したもの、とにわけたう

えで、その性格を音注と義注との関係でとらえる。こうすることによって、Bは訓漢字としてでなく、日本語の注記は万葉仮名で表わせることになり、音仮名と訓仮名の使用範囲をある程度分けることができることになるとする。そのうえで「このような訓と音との機能分担は、訓注における被注字と、音仮名で示されたその読みという関係に類似している。」として「訓字に基づく変体漢文的枠組みから直接的に、音仮名を交えて日本語の語音のまま表記する様式が生み出されていったとは想像しにくい。訓読注記を伴うような漢文訓読という理解行為を通して初めて、その場その場の読み方に忠実に、特に関係概念的意味を担うものとして抽出される語音を音仮名で表記するという様式が発生してくるように考えられる。」（四〇頁）と、「漢字万葉仮名交り文」への展開を想定する。これは、重要な指摘であり、大筋で認められよう。ただし、注釈が必要である。

この大筋を認めるには、「訓読注記を伴うような漢文訓読という理解行為」と、「関係概念的意味を担うもの」を自身のことばの内に分節するといった、ことばに対する高度の反省が前提になることである。これは表裏一体のものであり、ここには高い知識層による営為がある。漢字による日本語書記成立時代は、たしかにこのような位相でもってその営為が語られるわけであり、本章の扱う時代は、まさにそれにあたる。しかしながら、これを受けて、次の第四節で、「位相論」の観点から文体による仮名の使用字母の相違をとらえることになるわけだが、「漢字万葉仮名交り文」成立過程においては、むしろそこで扱われる「とりあえず記録しておくといった非文芸的な書記に資する」ところの「通用文体」を使用する層も視野に入れる必要があろう。つまり、次世代の一段低い識字層との関係が重要になる。ここでは、次章の各文体の成立論を先取りした記述となっており、誤解されかねないが、あくまで原理的な意味での成立過程として読んでおく必要がある。

三、術語の問題

第二章では、「上代表記体」の成立として、和文、万葉仮名交り文、宣命体、万葉仮名文、それぞれの成立を説く。これに先立って上代の文体・表記体に整理が加えられ、その分類が示される。ここには、著者独自の歴史観に従った「なまえ」（術語）がいくつか見られ、それぞれに検討を要する。

まず、全体を漢文体と和文体に二分する。従来の「変体漢文」はこれによって「和文体」に含まれることになり、「なまえ」も「変格和文」と改められる。ここで「和文」の概念を導入するのは、吉沢義則、徳光久也らによる分類を参照してのことであり、歴史学の世界でも従来から使用されてきたものである。ただし、和文の語は平安時代のいわゆる仮名文に対しても用いられることがあり、それとの区別には注意しなければならない。たしかに「漢文」に準ずるものとしていわゆる「日本語」でヨムべきものを「漢文」の範疇に含めるのは問題がある。しかしそれ以上に、はたして古代の文章を、基盤となる言語によって二分するのがよいのかどう

かは検討しておく必要があろう。基盤とする言語が中国語か日本語かというのは、両者を両極として考えた場合であり、その境界はそれほど明確なものではない。日本語に干渉された中国語と、中国語に干渉された日本語との間にどのような線引きが出来るであろうか。むしろ、中間的な文章こそがいわゆる変体漢文というものの本質であり、それが日本語に傾くか中国語に傾くかは、程度の差でしかないのではないか。もちろん、分類を施すには二分法が基本であり、その第一分類基準を基となる言語におくことは致し方ないことである。おそらくは、表記体ということと、以後に展開される文体にかかわる議論とを明確に区別し、文体としての「和文」(日本語文)を「漢文」(中国語文)と区別しようとする著者の基本姿勢のなせるわざと思量するが、今述べた連続性をどう処理するのか聞きたいところである。

著者はまた、稲岡耕二によって示された、万葉集人麻呂歌集の略体歌から非略体歌への史的展開を応用して、略体和文と非略体和文を歌表記のそれに平行する形で考えられる。稲岡の古体・新体(いわゆる略体・非略体)の論は、歌の書記の方法が日本語の表記史の方法に平行する形であらわれ、それが人麻呂の営為によるものであり、仮名書きの歌の成立はそれよりも遅れるとするものである。その是非については、従来より議論のあるところであるが、略体歌の「ような」方法が、非略体歌の「ような」方法に先行するということは、歌の表記ということを別にして、「原理的あるいは理論的」には了解されるように思われる。そこを明確にしたのが、「略体和文」と「非略体和文」という、略体歌表記・非略体歌表記とは似て異なる概念であろう(第一章では「概要体」と「精細体」という語も提唱されている(六七頁))。ただしここにも、程度の問題がある。文章全体に宣命書きを含むものは宣命体として一見してわかるが、部分的に一二箇所宣命書きを含むような文章では、むしろ宣命体とするよりは略体和文として考察するほうが実情にあう。宣命体と宣命書きを含むいわゆる変体漢文とは分けて考えるべきではないか。

古代の「和文体」をその表記様式によって略体和文、非略体和文、表音式和文にわけることは、十分に納得できるが、それが文章全体に渡って文体・表記体を特徴付けるものと、そうではなくてあくまで部分的な表記法の問題として別に文体・表記体の基準を立てる必要のあるものとのあることは、それをそのまま、従来からの変格和文、漢字万葉仮名交り文、宣命体、万葉仮名文に対応させることへの疑問につながる。まだしばらくは、正格の漢文と仮名書きの日本語文との間を、いわゆる変体漢文(擬似漢文)の大きなくくりの中での連続非連続として古代の文章を考えたいというのが、評者のいつわらざる感想である。

四、表記体の展開

第二章第二節以下には、漢字万葉仮名交り文、宣命体、万葉仮名文それぞれの成立が語られる。細部については、すでに発表してきたいくつかの論考における評者の見解と、異なる部分もある。

しかしそれは、先に述べた「歴史の風景」の違いといえようか。複雑に絡み合った糸を、資料の厳密な批評と明快な論理の流れとで解きほぐそうとする著者の方法を評価したい。そんな中で「補助字」という観点を導入し仮名交じりへの方向を示された点は注意される（第二節）。これによって、人麻呂歌集略体歌表記と略体和文との違いが明らかになり、また、万葉仮名交り文と宣命体との差異も明らかになった。このことは、漢字仮名交り文の成立が、一つの流れでは説明できないことをも意味していよう。つまり、著者のいわれる略体表記から一つには助辞から補助字を含んでいって万葉仮名交じり文へと展開する流れ、もう一つには補助字を含まないで宣命体へと展開する流れとが、別流としてあったと考えられる。そしてこのことは、第三章第二節における動詞活用語尾表記によっても確認される（一八九頁）。ただしこのことは、稲岡説の再検討を促すものであり、「略体歌表記は文字列の意図的な省略ではなく、韻律によって音列の限定が可能なことを背景とした略体和文（いわゆる変体漢文）の延長上にある必然的な表記であったと考えられる。その意味で、略体歌表記は非略体歌表記に先立つものと認めてよい。」（八七頁）との発言も、原理的な面はともかく、万葉集という編集された作品の理解という面からは慎重な解釈が要求されるものと思われる。

宣命体についても、「補助字を交えない点で、人麻呂歌集略体歌表記ではなく、正訓を主体とする略体和文を基盤にし」ており、そこに見られる万葉仮名表記は「訓読を限定するためのもの」（一一〇頁）とするならば、当然、非略体和文とは別の展開を経ているわけで、宣命大書体から小書体への展開も原理的に考え直されてもよい。宣命書きと宣命体とどこかで分かれるような展開を考慮すべきなのかもしれない。

また、万葉仮名文についても、近年、「なにはづ」の歌の木簡があいついで出土し下級官人の仮名の用法が見えかけている。まだ、結論を覆すような発見はないが、「非略体歌成立後」でなければならないのかどうか、「当初は音仮名だけで」は原理的にはそうであるが、位相の面を考慮すると比較的早くから一字一音節の訓仮名が含まれていたことが考えられるなど、やはり再検討する必要が今日の状況からは生じてきている。

五、表記と文体

後半の第三章第四章は、古代文献の文体の各論となっている。第三章では古事記、万葉集、風土記の文体特徴を、そして第四章では宣命と祝詞の文体特徴を、それぞれ個別にとらえる。古事記の方法を「和漢の妥協の上に成立し」「そのままではほとんど継承されなかった。」（一六五頁）とし、万葉集について「個々人の文芸的な営為に帰属する」（一八九頁）など、共感できる点が多く、個別の分析が即歴史的な流れにはつながらないことをわれわれは強く認識しておくべきである。しかし、これらについて、細部にわたって紹介することはおいて、第三章のまとめに位置する第四節に言及しておく。

表題にもあるように本書の関心のひとつは「文体」である。古代、漢字専用時代にあって表記体と文体との差異はそれほど明確ではない。しかしながら、同時にその区別には注意が要求される。そこで著者は、あらかじめ文体ということを広く考えた上で、さまざまの角度から文体研究の指標をあげられる。「覚書」とあるように羅列的に話が進むが、その方向は、これから「文体」を考える上で一つの指針となるものと思われる。

第二章で表記体の成立として語られるその研究史は、文体の分類から発している。そのことが物語るように、従来の「文体」はこと古代語に関する限り表記体の問題であった。もちろん語法等の文体に言及した論も少なくはなかったが、表記体と文体との関係は、しばしば不可分なものとしてとらえられてきた。もちろん、不可分な面があることは事実である。しかしその結果、文体を考察する指標が著者が提示されている範囲に及ぶことは少なかったのではあるまいか。その点からも、古代の文章の文体ということを、表記体との関係でどう絡めて行くか、今後の大きな課題であろう。

そんな観点から、第四章の宣命・祝詞について、「宣命の内部における史的変化を明らかにすることは宣命文体が保守的、慣用的表現として一面化される危険を除くことにもなり、時期的な揺れをもった生きた奈良時代語として再考する端緒ともなろう。」(二八〇頁)、「このような表現の逆転は祝詞がまだ墨守されるだけの固定的なものではなく、表現が再吟味され、生き生きと展開されていた時代のものであったことを示すものであろう。」(三三〇頁)というような帰結が得られる。まさに、古代日本語書記にまつわる大きな展開を預言するものである。これは、著者の課題でもあろうが、われわれ読者に与えられた課題でもある。われわれは、もう一度、それぞれの個別の資料を個別にとらえなおし、その上で見渡せる「歴史の風景」を構築する作業を進めなければならない。本書のオーソドックスな方法と真摯な分析は、その道しるべと位置付けることができよう。

著者の興味と評者の興味は、対象と方法とにおいて大きく重なっている。そして、おおむね共感を持って幾多の論考を読ませていただいてきた。しかしながら、そこにまた異なった「歴史の風景」が見えるのも事実である。著者の指摘される事柄に常に導かれて、評者自身の風景が目の前にあることを、本書を読んで改めて確認できた。同時代に興味を同じくするものとして、まだ見ぬ著者に何か語りかけてみたい。そんな思いで非力をかえりみず筆をとった次第。理解不足や妄言の数々、ご寛恕を願う。

(二〇〇〇年五月一〇日発行　吉川弘文館刊　A5判　三五二ページ　本体価格九八〇〇円)

――大阪女子大学教授――

(二〇〇二年一月七日　受理)